＜前回：宗教研究の基礎論としての宗教哲学＞
０．宗教哲学は、宗教の哲学であり、宗教研究の哲学である。
　宗教研究の基礎論としての宗教哲学
　　宗教研究は次の三つの問いを前提とする。
　　なぜ宗教か（近代の宗教批判にもかかわらず）／宗教とは何か（宗教本質論）／どの宗教なのか（宗教的多元性）
　　近代以降の宗教哲学におけて、この問題を確認すること。
　　シュライアマハー／ティリッヒ／波多野精一／ヒック

Ａ．シュライアマハーの宗教哲学

１．シュライアマハーと宗教哲学の基本問題

（１）『宗教論』の信仰概念

４．シュライアマハー宗教哲学の特徴
①宗教・信仰の直接的場へ「感情」「直接意識」　→　宗教現象学へ
②人間性における宗教　→　弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）
③「感情」から「認識」「行為」へ　→人間の存在構造における宗教性（哲学的人間学）
　これは、信仰を精神の諸機能の一つの特定機能としての知性、意志、感情のいずれかと同一視することの不十分さを意味する。むしろ、これらの諸機能を統合した人間精神（人間理性、人間存在＝実存、人間性）における本質的な可能性として宗教・キリスト教を理解すること、その上でその特殊な実現としてのキリスト教的信仰の意義を論じすることが、要求される。
④実定性　→　個別的で歴史的な諸宗教（実定宗教）への定位 cf.　理神論・自然宗教
５．「共同体と信仰」という問題連関（第三講、第四講の意義）:「孤立した個」の限界
・「およそ実存論神学におけるひとつの問題点は、信仰的現存在の決断における脱自的超越がいかにして「共人性」(Mitmenschlichkeit)を自己化するか、という問題である」、「実存論神学における最大の弱点は教会論にある。」（森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年、506頁）
「「わたし」と「われわれ」は、それほど単純に同一視されたり、単純に相互転換されるとは、考えられない。」（同書、512頁）
・以上の点で、シュライアマハーの宗教論の第三講、第四講は、注目に値する。

（２）シュライアマハーと宗教哲学の基本問題

６．宗教哲学とはいかなる学問か
・波多野：「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である。」
・批判的実在論：宗教も科学もそれがコミットする存在の実在性を前提にする。そして、宗教と科学という人間の活動は実在する。この実在する宗教と科学とが存立するための条件を解明することが、宗教哲学と科学哲学の課題となる。
　「宗教が可能であるためには、その主体である人間はどのようでなければならないか。」（←ロイ・バスカー「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようでなければならないか。」）
７．宗教哲学の基本問題（宗教研究基礎論、宗教研究の哲学）→具体的な多様な宗教研究
　　（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994 年、13-18 頁）
　(1)宗教とは何か。（第二講・宗教の概念規定：哲学的人間学・現象学的類型論）
　(2)宗教はいかなる積極的な存在意味を持つのか。（第一講・宗教批判の批判的検討）
　(3)なぜ、多様な宗教が存在するのか。（第五講・宗教的多元性）
　　↓
　この基本問題との関わりで、シュライアマハー、波多野精一、ティリッヒ、ヒックを検

討する。

Ｂ．ヒックの宗教哲学

（１）宗教の神学

１．宗教的多元性（複数性）と宗教多元主義：古い問題と新しい問題
２．近代的問題状況：人間の営みとしての宗教とその多様性、その中におけるキリスト教
３．宗教的多元性と教派的多元性　→　エキュメニズム
４．現実：対立・相克（戦争）、民族・経済・政治の状況下での宗教
５．多様性を整理しキリスト教をそこに位置づける議論
　　・啓示論、救済論、歴史神学　→　土着化論
　　・宗教類型論から価値判断へ：排他主義、包括主義、多元主義
６．諸テーマ（問題群）：戦争と平和（戦争論・平和論）、宗教間対話（対話論）、寛容（宗教的寛容論・信教の自由・政教分離）

（２）ヒックと英語圏の宗教哲学

・*Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963（1990）.
・*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.
・*Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.

（３）ヒック宗教哲学の基本構想

Ａ．宗教概念
　宗教史・宗教現象　→　基軸時代・救済宗教：自己中心から実在中心への転換
　ポスト・モダン（本質主義以降）の概念規定　→ヴィトゲンシュタイン・家族的類似性
Ｂ．宗教批判：近代以降の思想状況における宗教論
　自然主義への論駁、宗教経験の擁護　→　合理性概念の再検討、終末論、
　　宇宙的楽観主義、還元主義批判
　神の存在論証と悪論・神義論
　宗教言語論　→　宗教的実在論
Ｃ．宗教的多元性：宗教的状況の現代
　多元性と実在　→　the Real
　キリスト教の再解釈　→　排他主義、包括主義批判

　以上の三つの問題領域は相互に結びついて宗教哲学の基礎問題を構成する。

（４）宗教言語と宗教的実在論

　ここでは、Ｂについてヒックの議論をまとめてみよう。
１．『人はいかにして神に出会うか――宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。
・The principle of critical trust
「ムーアは「二十世紀前半のもっとも重要な哲学者の一人であるが、この点でヒュームを支持し、私たちは証明できない多くのことを知っていると主張した。」（106）
　　There exists at present a living human body, which is *my* body.
　　The earth has existed also for many years before my body was born.
「通常、私たちは自らの経験を信頼している。また、もし信頼しなければ、一日たりとも、いや一時間たりとも生きていくことはできないだろう。しかし、これは盲目的な信頼ではなく、いつでも修正できる批判的な信頼である」（107-108）
　「私たちが生きていくうえで拠りどころとしている暗黙の原理は、批判的信頼ということになる。」（108）
　「では、どうしてこの「批判的信頼」のを原理を、宗教体験も含めて、明かな認知体験一般に当てはめてはいけないのだろうか。」（109）

・Experiencing as interpreting / critical realism

「世界についての意識的経験と意識される世界とのあいだの関係に関して、三つの主要な立場」の区別。

「一つは素朴実在論」「私たちの身に周りの世界はそのあるがままの姿であるように思えるとする、日常的な自然な想定」、「すべての実際的な目的のためにはこれで何の支障もない。というのも、進化するにつれ、私たち人間の感覚は」「絶えず調節されてきたからである。」(119)

「素朴実在論に真っ向から対立するのが「観念論」である。これは、知覚された世界は私たちの意識のなかにあるだけである――より正確には私の意識のなかにだけある――、なぜなら私が交互作用する他者は、私の知覚世界の一部であるからだ、と主張する立場である。」(120)

「三つ目の、中間に立つ立場は、批判的実在論である。その基本原理は近代哲学に最大の影響を及ぼしたイマニエル・カント」「にまでさかのぼる。カント以前にも類似の考えは多くあったが、その内容を体系的な方法で明らかにしたのはカントであった」、「つてつもなく複雑」「ところどころ多様な解釈を迎え入れている」、「しかしカントは、私たちを超える実在、私たちから独立して存在する実在というもの容認した。けれども、実在はそれ自体では意識されず、観察もされないと論じた。それは、ただ人間精神の生得的構造としてのみ、その実在からのインパクト（衝撃）を、現象界のかたちをとって、意識にもたらすことができる。そこで私たちは各自の認知的感官によって、また意識の諸形式と諸カテゴリーによって、私たちに現れるままのものとして世界を意識するのである。」(121)

「「批判的実在論」というのは、二十世紀のアメリカの哲学者によって生みだされた言葉であるが、これは世界が存在すると気づくことに心が創造的に寄与することを認める一方、その世界が私たちからは独立して存在するという実在論的な主張を表明する。その主張は十分に確証され、認知心理学や知識社会学において長く認められてきた。」(122)

３．宗教経験への信頼は批判的実在論として擁護できる（Ｂ）。

宗教経験について理論的な議論は無意味ではない。

＋

宗教史と現代の宗教的状況の事実としての宗教の複数性の問題（Ｃ）。

↓

この二つを理解可能にする宗教概念とはいかなるものか（宗教とは何か＝Ａ）。

４．こうした三つの問いを宗教哲学的に明確に論じた上で、キリスト教思想の内容の議論を展開する。

８．宗教哲学と地域性１――古代地中海世界

（０）神学の地域性→思考の地域性？

地域性は「パラダイム」か？

・日本のプロテスタント神学の「ゲルマン捕囚」。
・ドイツとアメリカ。ティリッヒの場合。
・ヒック、英語圏の宗教哲学

（１）古代地中海世界と宇宙論

１．キリスト教との関わりで、第一に取り上げられるべきは、キリスト教の成立・形成・展開の最初の文脈になった、古代ヘレニズム世界・古代地中海世界である。旧約聖書に関して言えば、古代エジプトと古代メソポタミアの先進文明、また同時代としてはペルシャ帝国あるいはゾロアスター教が視野に入れられねばならない。

Barbette Stanley Spaeth（ed.）, *The Cambridge Companion to Ancient Mediterranean Religions*,

Cambridge University Press, 2913.

２．この古代地中海世界の地域性で注目べきものは、宇宙論的な枠組みと、天と地の照応関係である。神々の領域としての星界と地上の王国（帝国から都市国家まで）との相関性に基づく宗教文化。特に、都市の勃興は、この地域性を理解する上でのポイントとなる。

３．古代オリエントの都市の勃興に遡ることによって、文明（男女の二分法と男性優位）を論じるという議論。たとえば、フェミニスト神学者リューサー。
「第二の神話は、シュメールに発し、バビロニアの新しい帝国中心地で特に発達したマルドゥク＝ティアマト物語である。これは、古くからの女神ティアマトと彼女の配偶者および追従者が、都市＝農耕世界の新しい神々と女神たち――都市国家バビロニアの神で勇者のマルドゥクに代表される――によって敗北を喫するという物語である。」（R=R・リューサー『性差別と神の語りかけ――フェミニスト神学の試み』新教出版社）

４．「文明は文化に胚胎する。・・・人間の技術を志向する傾向が国家形成によって飛躍的に助長されると、それは社会システムとして立ち現れ、独自の法則に従って発展し、文明を築く。・・・国家秩序を神聖化する宗教もまた、文明の自己拡大の要求に協力する。」（並木浩一「文化と文明」、『並木浩一著作集２　批評としての旧約学』日本キリスト教団出版局）

５．キリスト教思想の前提をなす、旧約聖書的世界と古代ヘレニズム世界とは、以上の宇宙論的枠の中で、相互交流を行った。この最初の本格的な接点としてのヘレニズム・ユダヤ教。

６．ユダヤ教とキリスト教との関係：ユダヤ教はキリスト教の母体である。
　　キリスト教への多層的・多面的な影響
　　聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者

（２）哲学の一部門としての神学＝神学の起源　→　キリスト教神学へ

７．神学は古代ギリシャ哲学起源である　→　キリスト教・教父
・神学とは本来哲学（より厳密には古代ギリシャ思想）の一部門である。
・神学自体がギリシャ起源であり、キリスト教化されることで、キリスト教神学となった。
　　Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*.
　　パネンベルク『学問論と神学』教文館。
　　「序論　学問論と神学」の「第二節　神学の学問性要求の起源」

８．プラトンの自然神学（『法律』第 10 巻、『プラトン全集　13』岩波書店）
「法律の命ずるとおりに神々の存在を信ずる者で、自らすすんで不敬なことを行なったり、また不法な言葉を口にしたりした者は、かつて誰ひとりいないのである。もし誰かそういうことをする者がいるとすれば、それは彼が、次に三つの誤った考え方のうちどれか一つにおちいっているからである」（885B）
　「神々を存在しないと考えていないか」「神々は存在するけれども、人間のことを気づかってはくれないと考えているか」「神々は犠牲や祈願によって心を動かされるから、機嫌をとりやすいものであると考えているか」
「あのような[無神論の]説が、人類全体と言ってもいいほどに広がっているのでなかったなら、神々の存在を擁護するための議論は一つも必要なかったでしょうからね」（891B）
「自分自身で動かす動は、すべての運動変化の始原として、静止しているもののなかにお

いては最初に生じてくるものであり、運動変化しているもののなかでは第一番目のものであるから、その動こそが必然的に、あらゆる運動変化のなかでは最も古くて最も強力なものである、ということになるでしょう」(895B)
「「魂」という名前をもつもの、それの定義」「「自分で自分を動かすことのできる動」」(895D)、「魂がすべてのものにとって、あらゆる変化や運動の原因のであること」(896B)
「動いているものにはすべて魂が宿っていて、これを統轄しているのだとすると、魂は天をも統轄していると言わざるをえないではありませんか」(896E)、「もし天と天のなかに存在するすべてのものとの軌道や運行全体が「知性」の運動や回転や計算と同様な性質のものであって、それに類似した仕かたで行なわれているのであれば、その場合には明らかに、最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そしていま言われたような[知性が運動するのと同様な]軌道にそって、宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません」(897C)
「それらはあらゆる徳をそなえた善い魂なのであるから、これらの魂は神であると、わたしたちは言うことになるでしょう」(899B)
「神々について君のような考え方をしている者は、君一人だけではないし、また君の友人たちが最初で初めの人というわけでもない。いな、そのような病気にとりつかれている者は、多い少ないはあれ、いつの時代にも現われてくるものだ」(888B)
「その連中がまず最初に主張していることは、神々は人為（技術）によって、つまり自然によってではなく、一種の法律（慣習）によって存在しているのだということです」(889E)
↓
自然神学の原型
９．ロゴス論の場合：ヘラクレイトス、ストア、フィロン → 新約聖書・教父
・波多野精一『西洋宗教思想史（希臘の巻）』(『波多野精一全集 第三巻』)
・ストア哲学、アレクサンドリアのフィロン
平石善司『フィロン研究』創文社、1991 年。
「第一部 フィロンのロゴス論」
フィロン『世界の創造』(町田啓、田子多津子訳）教文館、2007 年。
10. アウグスティヌス『神の国』第 4 巻第 27 章
「もっとも学識すぐれた祭司長スカェウォラは三種の神々を区別してと、書に書かれているが、その第一は詩人によるものであり、第二は哲学者によるものであり、第三は国家の指導者によるものである。それによれば、第一のものは、神々にふさわしくない多くのつくりごとを含んでいるからとるにたらず、第二のものは、余分なものや、それを知ることが人民に有害であるものをももっているから国家にはあわない。」(服部英次郎訳・岩波文庫『神の国（一）』329 頁）
↓
宗教、政治、自然学・形而上学は、相互に区別されつつも、一つの知的世界を構築している。
11. キリスト教神学が、ギリシャ哲学的な意味における神学として完成したのは、4 世紀。
キリスト教神学における政治神学の成立。
民衆の神学・神話的神学（詩人）:
自然の神学・哲学的神学（哲学者）:

（３）まとめ

12. キリスト教・キリスト教思想は、二つの源泉の相互関係において理解する必要がある。
この相互関係の文脈が、古代地中海世界（とその精神状況）であり、宇宙論的タイプの宗教の伝統が普及している地域であった。→ 現代までの規定要因の一つ。
・自然神学は宗教に関わる哲学的思惟に属する。

・自然神学は、神学の学的基盤をめぐる議論を介してキリスト教神学と緊密な連関を有する。

↓

13．課題：

・「自然神学」というテーマから、キリスト教思想を概観し、宗教哲学へと繋げる。

・伝統的な自然神学を批判的に再考し、拡張・刷新する。

（４）伝統的な自然神学理解

14．芳賀力『神学の小径Ⅲ――創造への問い』（キリスト新聞社、2015年）

「「自然神学」と「自然の神学」とを明確に区別しておかねければならない。」

「自然神学（a natural theology）とは、イスラエルとイエスにおける歴史的な啓示を抜きにして、したがって聖書的な語りとは無関係に、ただもっぱら人間の理性だけを用いて、自然の中に現れた神について語ろうとする方法である。」

「これに対して自然の神学（a theology of nature）とは、啓示に基づいて、したがって聖書的な語りを通して自然を読み解き、啓示の光によって洗礼を授けられた理性によって、自然を神の創造の作品として讃美し神学する方法である。」（p.25-26）

15．ジョン・ポーキングホーン「３　終末論の信頼性：創発的な目的論的なプロセス」（ピーターズ他編『死者の復活――神学的・科学的論考集』日本キリスト教団出版局、2016年、72-88頁）

「もし新しい自然神学がこのメタ科学的議論に貢献するとしたら、それは科学への補完として貢献するのであって、科学と衝突してのことではない。これは（自然の巧妙なメカニズムを設計して作り上げた神的な時計職人として神に訴えるウィリアム・ペイリーの訴えのような）古いスタイルの自然神学とは対照をなす。この古いスタイルの自然神学は、眼という光学系の発達のような出来事についての科学的説明に対して、競争相手として姿を現したのである。」（73）

↓

啓示神学と対立する悪しき神学（古いスタイルの自然神学）、疑似科学といったイメージをいまだ脱していない。

15．トーマス・Ｆ・トランス『科学としての神学の基礎』教文館、1990年。

Thomas Forsyth Torrance, *The Ground and Grammer of Theology*,
University Press of Virginia, 1980.

「自然神学は正しく理解された場合には啓示神学の「内に」含まれる、とバルトは主張する」（121）、「自然神学は動的で実在論的な神学の中に組み込まれている時空構造である」（124）、「神学的科学と自然科学との間には、本来的意味での「自然な」連関が存在するのである」（125）。

16．モルトマン『神学的思考の諸経験――キリスト教神学の道と形』新教出版社。

「Ⅰ　神学とは何か」の「第六節　自然神学」

キリスト教神学の前提としての自然神学
キリスト教神学に目標としての自然神学
キリスト教神学自体が真の自然神学である
キリスト教神学の課題としての自然神学

（２）自然神学とは何だったのか

↓

次回、「９．宗教哲学と地域性２――キリスト教中世」（12/4）へ